

コヘレトの言葉 3章 1節 - 15節

ローマの信徒への手紙 13章 11節 - 14節

- 1、聖書は歴史的書物である。それぞれの時代にイスラエルの人々がどのように神をイメージして生きたかが、記されている。例えば創世記2章は「その日、主（ヤハウェ）なる神が園の中を歩く音が聞こえた」（2:8）と記す。何か人間的だ。
- 2、神のイメージ（神との関係の捉え方）はその時の社会態勢や歴史、地理、文化、宗教などの条件によって変わってくる。ラテン・アメリカの「ベルボ聖書センター」の中ノ瀬重之（シゲ）神父は旧約聖書の神のイメージを整理して考える。①部族連合社会（B.C. 1250-1030）。共同所有の土地での相互扶助時代（天幕での友愛の神）。②王政（B.C. 1030-579）統一王国の成立で王と神殿支配が始まり土地が民から奪われ搾取が始まる。それへの抵抗が始まる。（預言者の神）。③補囚（B.C. 597-538）。全能で遠い神（エゼキエル）、賤いの神（第二イザヤ）と神のイメージの二分化。④補囚後（ペルシャ、ギリシャ帝国支配を神権政治が補完する）。農民の貧困層（飢え、無宿、早死、奴隷状態）への急激な没落。全能の神（エル・シャダイ）は支配者の味方。その中でコヘレトは支配者の神（「因果応報」の神）の理念化を批判し、「神への畏れ」を説いた。神を「理念」から解放し、「生きる経験」の中での捉え直しを促した、これはコヘレトの大事な点である。「補囚後の紀元538年以降、・・・神殿が再建されるとイスラエル共同体は神殿や律法、いけにえの儀式を中心に組織されます。神はしだいに民から遠ざけられていきます。事実支配階級のエリートたちは神のイメージを乱用し、民に畏れを抱かせて民を統制し搾取します。彼らは神の位置に自らを置き、いのちの神、歴史の主を畏れない傲慢な人々です。このような神のイメージの乱用に対して・（コヘレト）は神を畏れ、歴史と民の生活のなかに受肉した神を信じ、困難の中にある人々と連帯します」（155頁）。
- 3、コヘレト3章は人生の28場面の時を掲げる。半分は肯定的。半分は否定的。28は7の4倍で全体性と完全性を示す。人間の最大限の日常経験を収めようとする。イスラエル民族が歴史の渦中で体得した経験が凝縮されたもの。この凝縮の中で神のイメージを幾つかに纏める。①歴史の神。「神が人の子らにお与えになった務めを見極めた」（3:11）。②いのちの神。「喜び楽しんで一生を送ること」（3:12）。③無償の愛の神（「応報の神学」には収まらない）。④神への畏れ。「神は人間が神を畏れるように定めされた」（3:14）。⑤迫害される者の神。「追いやられてものを、神は尋ね求められる」（3:15）。「コヘレトの言葉」は、人々の苦悩を見て賢者が神について省察し、記述したもの。
- 4、3章11章はそれらの神のイメージの極みである。「神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終わりまで見きわめることはできない。」（口語訳）。「何ごとにも時がある」という一時一時を大切に生きて、自分の神のイメージの経験を豊かにしてゆきたい。神は生きて働き給う。